

文化振興ビジョンを推進するための懇話会 第5回会議概要

1 日 時：平成24年12月26日（水） 15：00～17：00

2 場 所：市民会館 第6会議室

3 出席者

(1) 委員（7名）

畠山座長、鬼木副座長、石田委員、神馬委員、露木委員、深野委員、間瀬委員

(2) 行政（6名）

諸星文化部長、瀬戸管理監、中津川文化政策課長、福井文化政策係長、高瀬芸術文化創造係長、田中主事

4 傍聴者 1名

5 会議の概要

(1) 第4回会議のふりかえり

第4回会議概要から主要な意見を抜粋して、前回会議をふりかえる。

(2) 推進体制について H24年度まとめ

前回会議で提出したまとめ案の改正版について事務局から説明したのち、意見交換をした。

【石田氏】

- ・まとめ案の4ページ本文4行目に「最もベター」とあるが、これは「ベスト」という意味であり、別の言葉に言い換えた方がよい。
- ・6ページのプラットフォーム型のイメージ図について、それぞれの項目を同じレベルで扱ってよいか疑問である。目的と機能が混合しており、例えば「芸術文化」は振興が目的だが、「調査・評価」「学校プログラム」等は行為なので、扱いが違うのではないか。
- ・7ページのまとめ「◎以上のことから、・・・」部分はもう少し話し合いが必要なのではないか。「行政がサポートする」という柔らかな表現では、力強い推進が可能になるのか気になる。

【深野氏】

- ・芸術文化推進センターという名称に変更したようだが、この名称だと文化＝芸術という定義づけになっているように思える。
- ・暮らしや産業も文化である。芸術文化創造拠点併設型のイメージを見るとこれらの文化

が極めて弱いイメージになってしまうと思われる。推進体制のスタイルとしてまとめた案を改めて見てみると、文化の定義が狭くなっている。

- ・芸術文化創造拠点併設型とプラットフォーム型の定義のギャップが大きいのではないかと。

【石田氏】

- ・芸術文化という言葉を使ってしまうと、センターの役割を否定してしまう印象を受ける。芸術文化という言葉の使い方も注意した方が良い。
- ・小田原市がこの方向で行くならば、民間主導のプラットフォームで大丈夫なのではないか。
- ・小田原は文化の部分が幅広く強い街だと思うので、それを誇りにするべき。その場合に「芸術文化創造」ということでくくっていいのか。

【事務局】

- ・前回の懇話会で配布したまとめ案では市民ホールと書いていたが、12月5日に行った記者発表において、市民ホールという名称はハードの部分に光が当たりすぎているということで、芸術文化創造センターという呼び名に変更した。
- ・正式名称を変えたわけではなく、そもそも「市民ホール」も正式名称ではない。
- ・芸術文化創造センターについては、市民ホールの基本構想の段階で、将来的に発信拠点となるもので呼び慣らすのがふさわしいとしている。この名称は共通の呼び名の固有名称として使用していることを理解していただきたい。また今後この名称が正式名称になるのかは未定である。

【深野氏】

- ・センターという機能として捉えて欲しいということか。

【事務局】

- ・芸術文化創造の機能を持つ建物を作るという意味を含んでいる。

【深野氏】

- ・芸術と文化の間に「・」を入れれば良かったのではないかと。4文字で「芸術文化」というイメージを受ける。

【事務局】

- ・芸術文化創造拠点併設型については、センターの中で幅広いビジョンの一部を担うが、過去の懇話会で、センターがやることとビジョンがやるプラットフォームはイコールではない、という話が出た。幅広い文化に係る活動をセンターの運営母体に担ってもらおうという意味であり、それをセンターの中に置く、というイメージである。
- ・プラットフォーム型については、拠点はどこでもよいが、みんなが入ったプラットフォーム作りを目指している、ということ。イメージは小田原文化評定。
- ・イメージ図の項目については、プラットフォームでやることという意味で、調査・評価や芸術文化、相談窓口の設置などの個々の小さなプラットフォームがあり、それを統括する大きなプラットフォームがあるという形をイメージしている。

【畠山座長】

- ・プラットフォーム型のイメージ図について、「小田原市におけるプラットフォームのイメージ」ではなく、「小田原市におけるプラットフォームの機能」ではないか
- ・「芸術文化」ではなく、「芸術文化の振興」などとした方がよいのではないか。

【事務局】

- ・プラットフォーム型のイメージ図は、やることと、対象が並列で書いてあるのでわかりにくいかもしれない。

【深野氏】

- ・一般市民は主体的に何に関わるのか。例えば祭りを見に行くという関わり方はあるが、それは観光客と変わらず、市民として何がやれるのかが引っ掛かる。芸術文化の創造の主体は市民と定義すると考えられるが、一般市民の何の関わりもない人をどう巻き込むか、プラットフォームは何を期待して活動していくのかが気になる場所である。
- ・地域活動等も企画されたものに参加するという関係でしかない。
- ・プラットフォームが「場」を用意し、呼びかけ、市民を集めて活動することをイメージとして持っているのだが、実際はそれでよいかわからない。自分の立場がはっきりしている市民は良いが、それ以外の市民に対して何を語りかけるのか、何に当てはまるのかが気になる。
- ・子どもがいる人は学校プログラムとの関わりがあり、合唱団に入っていれば芸術文化との関わりがあるが、聞くだけの人は何と関わりがあるのか。そのイメージをはっきりさせたい。

【事務局】

- ・芸術文化創造センターの議論の中で、演者としてステージに上がるだけでなく、それを聞く人も主体であり、市民参加であると言われてきた。また、文化施設の議論はすべての人に関わりがあると考えている。
- ・特別に何かを持たない人の方が多いが、客席に座って見たり聞いたりすることがそもそも創造的な活動であるという認識がまず大切である。観客がいない世界では芸術は芸術にならない。鑑賞する人がいて初めて芸術になる。
- ・鑑賞は非常に創造的な行為であり、全ての人に関わっているということから出発しないと文化の話が非常に特定の人だけの話になってしまう。ホールの話もそれを踏まえて進めているつもりである。
- ・広報小田原でも紹介したが、演じ手と観客という関係性の中間にアートマネジメントがあり、それをつなぐ役割（中間支援）が重要である。
- ・観客を集めて聞く環境を作るところに一つのサポートという形がある。アーティストと観客をつなぐ役割を理解したり、つなぐきっかけを作るためにワークショップの中で技術を伝えていく意味があるのではないか。そこに行政や専門家の役割があると思う。

【神馬氏】

- ・プラットフォーム型について、コーディネーターや関心のある人の洗い出しと拾い出しが必要であり、コーディネートの一つの項目として加えるのはどうか。

【事務局】

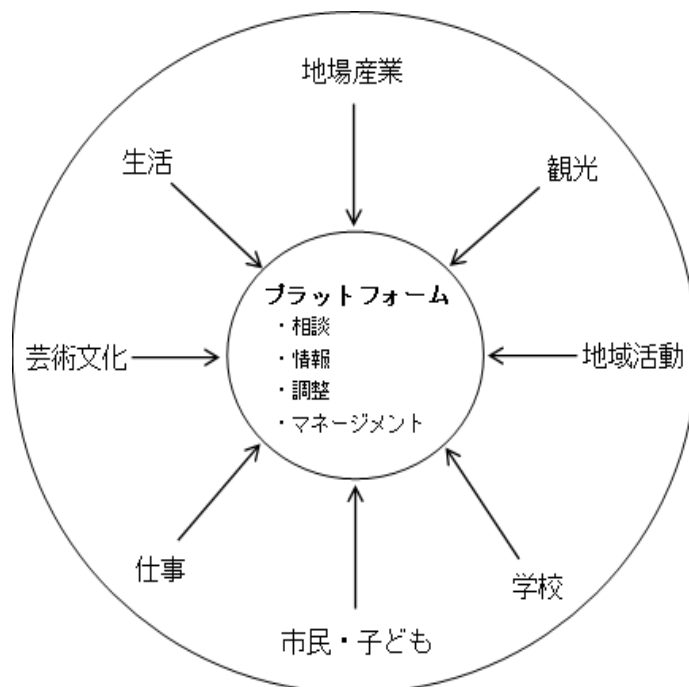
- ・文化振興ビジョンは芸術文化創造センターが担う機能とプラットフォームの機能が二重になっている部分があるが、ビジョンはそれを網羅した小田原の文化という捉え方をしている。
- ・木工は木工、蒲鉾は蒲鉾として、これらは産業であると思っている人がいるが、それは生業としての小田原の文化であるという意味でビジョンとして幅広く捉えているので、そこに関わっている人は関係ないようでも小田原市の文化を担っていることになる。
- ・観客として参加する場合でも小田原の文化芸術の中では担っている。
- ・観光、蒲鉾、木工とバラバラだが、それらを全て網羅してつなぎ合わせるのがビジョンの目的である。

【深野氏】

- ・その通りだと思うのだが、そうは書かれていない。

【畠山座長】

- ・市民、仕事、産業、生活などいろいろなものがあって取り巻いている。それをまとめているのがプラットフォームであり、それが調整をするというイメージではないか。



- ・生活の中には学校、地域生活、仕事、観光などがあるが、それがみんな中心のプラットフォームに寄り、その中で相談や調査やマネジメント等をするというイメージだと思う。

【石田氏】

- ・芸術文化創造拠点併設型のスタイルは、芸術文化創造センターが強く出すぎている。ビジョンも全てこの中でやる、と解釈されてしまい、それがはっきりとしたイメージになっている。
- ・芸術文化創造拠点型のイメージとプラットフォーム型という2つのアイディアと読めてしまう。
- ・芸術文化創造センターは芸術文化創造拠点併設型であり、市における芸術文化振興の重要な拠点になるのは周知のことだが、このイメージ図ではそれも含めて文化振興ビジョンをどう推進していくべきか、という全体が読み取れない。

【畠山座長】

- ・(1) 芸術文化創造拠点併設型と(2) プラットフォーム型の順番を逆にすべきか。併設型だと場所のイメージになるから、「併機能型・併せ持ち型」などとしてはどうか。

【事務局】

- ・センターが前提としてあり、まとめ案4ページの推進する対象のイメージにあるパターンA¹とB²の複合がセンターとしているために、本来考えるべきプラットフォーム型が主流になる。
- ・A、B、C³という並び方は流れとしては仕方がないが、想定されるスタイルに前書きを加えるなどしないと、センターが全面に出てしまう。
- ・センターはあくまでもビジョンで議論している中の一部である。AとBの複合と言いつつも、この図で見るとセンターがメインになっており、事務局側もイメージとして捉えきれていない。
- ・全体の横串を通す文化の推進体制の中の1つとしてセンターがあるのであり、その相関図が改めてイメージできないと位置関係が違って見えてしまう。

【石田氏】

- ・もう少し全体感を持つ図が描けると解決するのではないか。
- ・全体的なイメージがあり、その中の1つとしてセンターがある。さらにその中でビジョンの推進を担う役割を持つ、というイメージ。

【事務局】

- ・街のなりわいや活性化との融合もあるため芸術文化だけを担うセンターではないが、それを組み合わせた位置図を示すことが重要である。

【鬼木副座長】

- ・芸術文化、観光、産業などからプラットフォームの方に逆に関わっていくイメージである。

1 パターン A…行政が直接推進主体となるパターン

2 パターン B…新たに設立された外郭団体（文化財団のような存在）が推進主体となるパターン

3 パターン C…市内の文化団体や文化人によるプラットフォームが推進主体となるパターン

- ・プラットフォームそのものは自己増殖し、またはきめ細かく繊細になっていく。
- ・文化は生活、社会、人生と同じ大きさであり、社会の一部ではなく社会そのものである。
- ・プラットフォームは最終的には社会全体、生活全般に何らかの形で関わるものであるのではないか。
- ・文化振興ビジョンの19ページにもあるが、芸術を見に行く人だけでなく、日常的な場面で実は誰もが文化に関わっているということに気づいてほしい。文化を意識し、それによって人とつながっていくことが文化振興につながることをプラットフォームの意識に上らせる。
- ・個々人の小さなプラットフォームが市全体のプラットフォームに組み込まれていくのが理想だと思う。自分に関係ないと思っている人が最終的には誰もいなくなるのが理想。
- ・プラットフォームは推進体制でもあるが、市民が関わるものと考えれば間口は限りなく広がっていて畠山座長の表のようにどんどん入り込める（出ていける）ような形が出来上がっていくのがプラットフォームではないか。
- ・プラットフォーム型の要素を最初から決める必要はない。進めていく中で発展する自由さとオープンさがあるとよい。

【深野氏】

- ・機能として大事なのは、一市民に問い続けるということ。市民一人ひとりの生活や毎日が文化に関係あるということ問い続けることが大切である。そういう機能を持った組織やプラットフォームがあれば市民に参加意識が生まれる。それが文化創造ではないか。

【鬼木副座長】

- ・センターをビジョンの一部分だとわかる書き方を。
- ・プラットフォームとして決まった形を作るのではなく、機能を想定して始めてみて、そこから発展していくような柔軟なやり方がよい。

【石田氏】

- ・プラットフォーム型という緩やかな自然発生的で市民の自主性を強調した形を示していたが、自己増殖的だと大きくなる部分とほとんど発展しない部分がある。行政としてのバランスにどう負荷を掛けていくのか。

【鬼木副座長】

- ・民間や市民主導だと特定のジャンルに偏りが生まれてしまうが、行政がやれば公平性が保たれる。それが行政の役割ではないか。
- ・専門人材の登用や、都市間競争など他都市との競争の中で差を作るには、行政の役割が大きい。

【畠山座長】

- ・プラットフォームという言葉が場所のイメージになっている。どちらかと言うと文化団体や文化人による“クラウド（集合体、場）”というイメージだと思う。
- ・やりたい人が集まってやりたいことをやればよいのではないか。

【鬼木副座長】

- ・市民一人ひとりの活動がビジョンの推進を支えているという意識が必要だと思うので、まとめ案の初めに「市民一人ひとりの活動が主体（基本）です」という一文を入れてほしい。
- ・その上で推進していくために必要なことを具体的に述べていく。

【石田氏】

- ・この案はどこかに提出したり公開するのか。

【畠山座長】

- ・表紙に「小田原市」と書いてあり、小田原市が決めた提言のように思える。
- ・市として良いと思ったことや、これからの方向性をまとめたもの、という位置付けか。

【事務局】

- ・まとめ案は懇話会の成果物として、参考資料として提出する。
- ・これはあくまでも懇話会で話し合ったことをまとめたレポートのようなものである。

【石田氏】

- ・まとめ案 8 ページのアーツカウンシルの 2 番目の「日本のアーツカウンシルの問題として～」の一文は問題があるため（日本の問題ではなく各国でも同じような状況であるなど）、この文章が否定的に読まれてしまうと考えられるので、この一文を削除できないか。

【事務局】

- ・削除することとする。

【畠山座長】

- ・芸術文化創造拠点併設型に引っぱられてしまうこと、市民が普段の生活とかけ離れた芸術文化プラットフォームを作っているのか、と捉えてしまうかもしれない。市民の生活が基盤である。

【事務局】

- ・推進体制というと行政はすぐに組織作りに結び付けてしまう。プラットフォーム型であるべきというイメージがメンバーの皆さんの根底にあると思うが、芸術文化創造拠点併設型とプラットフォーム型のイメージはレベルが大きく異なる。
- ・A、B、C は市民の関わり方も含めてもう一度整理し、ビジョンの推進にあたっての前提となる議論が出てきたので、ここで大々的に見直したいと思う。センターはあくまでもツールであると示すことも含め、改めて整理する。

【間瀬氏】

- ・前提はビジョンであり、その一部分を切り取ったから先鋭的に見える。
- ・プラットフォームは市民という海に浮かぶ浮き輪に色々なものがくっついてきて、さらにそこに別の色々なものがくっついてくるイメージ。
- ・市民に呼びかけるベクトルをプラットフォームから発信する場があるとよい。寄りつける場を作り、アクションを起こす。

- ・根本的な見直しが必要かもしれない。ビジョンの一部分を切り取ったということを忘れてしまった。ビジョンの一部に入り込んでしまっており、反省しなければならない。もう一度ビジョンに戻る必要がある。

【事務局】

- ・ビジョンが捉えようとしているものは、小田原そのものが文化であると気づいてもらうこと。
- ・すでに動いている無尽蔵プロジェクトなどの活動を文化という視点から見えていない（産業や観光など）。文化として気づいてもらうにはどうやって進めていくかが推進体制である。
- ・体制の中ですでに個々に動いていることを気づいてもらうために何をやるかであり、小田原は文化をこれだけ広く捉えているということを知ってもらうのが文化振興ビジョンである。
- ・プラットフォームは個人がそれぞれの立ち位置によって自由に行き来できるものと考えている。

【深野氏】

- ・小田原は創造する場が多々あり、発信ネタも多い。しかし、家庭に来るのは広報小田原と回覧板のみで、それさえも伝わってない人もいる。
- ・発信することと同時に、市民一人ひとりにどうやってパイプを作るかが必要なのではないか。
- ・例えばタウンニュースを活用する。情報発信というと当たり前のように思えるが、人を街に引っ張り出すために、どうすべきかをきちんと考えていかなければならない。

【事務局】

- ・コミュニティやケアタウン（老人会や地域にこもりがちな人を呼ぶ）、世代間交流は行われているが、トータルで語るのは難しい。

【神馬氏】

- ・一人ひとりに手紙を出して誘うような体制が理想である。

【事務局】

- ・文化の認識の問題として鬼木副座長が発言していたが、それを推進体制の在り方として文章でまとめるのは難しいかもしれない。
- ・認識としてあるものと、それを深めるためにどこから動くのか、その中で最初は何をやるのかなどが混同している。また芸術文化創造拠点併設型をセンターが目立つ形で提示したことが混乱を招いていたのであり、事務局側も整理しきれていないのが現状である。
- ・他方で抽象度の高い議論ではなく、それぞれのテーマをどうするかということなど具体的な話をしなければならないというのは最もである。
- ・認識の問題、大きな進め方の問題、個別の事業として何をやるかという問題など、いくつかの段階の整理が必要である。その中で具体的なものをモデルとして入れないと何の

話をしているのかがわからない。

- ・センターが未完成な中で現時点では具体的なものと繋がりづらい。ビジョンの次の段階である小田原の文化に対する認識を深め進めていく上で、何をすることがまとめればよい。
- ・その辺りに関して皆さんの意見をいただければありがたい。

(3) 推進体制について 今後の検討事項について

事務局より、資料1の8ページおよび、資料2、3について説明した。また、来年度の懇話会では【既存団体の活用、ネットワークの構築】が具体的な話になるとして、無尽蔵プロジェクトや文化連盟等既存団体の現状を調査し、その内容を確認してもらい、それら団体と意見交換を考えていることについて説明し、今後の検討事項等も含めて意見を求めた。

【鬼木副座長】

- ・既存団体、関係団体との意見交換は文化団体に限らず、ビジョンに関わるものやビジョンでカバーしているものからも幅広く意見をもらい、意見交換の場に広く顔を出してもらうことがストロークの1つにつながる。

【石田氏】

- ・経済人も文化人として関わる時である。中心人物になってもらうべきである。そういう方々にこの意見交換会の場に呼ばれることで意識を持ってもらうことが大事。
- ・「情報発信プラットフォームを立ち上げる」と言っていた。プラットフォームは自己増殖という形ならば納得できるが、新たに立ち上げるのか。

【事務局】

- ・資料は自己増殖云々の前の内容だが、体制と言っているからには何らかの形を動かしていく必要があると考えている。
- ・様々な人が横のつながりを持つ（横串を刺す）という意味でも、色々なところに情報発信をしていきたいと思う人が集まればプラットフォームになり、市としてもそれを作っていくと考えている。

【石田氏】

- ・情報発信を手伝う人ではなく、情報発信したい人が集まる、という認識でよいのか。

【事務局】

- ・情報収集発信プラットフォームと書いているが、例えば既存団体に集まってもらって情報公開をするだけでも情報収集になる。ただ、それがプラットフォームになるかという点はまだそこまではわからない。そういったアクションの1つが情報収集と発信と考えているが、誰がどこまでやるかということについては未定である。
- ・無尽蔵プロジェクトに関わっている人や食文化の活性に関わっている人でも、市が文化振興ビジョンを作ったという認識がない。そういう人に入ってもらって「これも小田原の文化である」ということを意識して発信してもらい、芸術文化だけが文化ではなく、

産業や観光も文化であることをまず共有しないと市民に伝わらない。

- ・この場で情報誌を作っても届かない。それぞれの分野が発信しているものの中に共通項を作り一緒に発信してもらうことが文化である、ということへの気づきにつながるのあり、そこから始まる。
- ・そのためにはそういう認識のない人にも集まってもらい、ビジョンの存在を共有し、お互いができることから発信、連携することが始まりであるとする。

【石田氏】

- ・懇話会の中でそれをやるならば、懇話会の存在自体がプラットフォーム作りの立ち上げの手伝いをする場合もあるのか。

【事務局】

- ・体制作りの支援という意味で行政がやる仕事の1つになるかもしれない。

【石田氏】

- ・プラットフォームを作っていくという姿勢を外部にも見せるためには、成果として積み上げていく必要がある。

【畠山座長】

- ・小田原市のブランド化をする話が経済部にあり、様々な製品に「小田原の〇〇」と「小田原」を出していこうとしている。市のブランド化の時に横串を刺したようなコンセプトが欲しいという話が出たが、「小田原」や「小田原の手業」として横串をさせるのではないか。

【深野氏】

- ・足柄平野は日本でとれるものをほとんど取れるすごい地区、と言う話を聞いたことがある。小田原は豊かであるが豊かすぎてそれに気づいていない。
- ・ものがありすぎて困っていないので、外に売り込む必要もなく、そのために自ら発信することもないのではないか。

【露木氏】

- ・以前、平井太郎氏が小田原に住むことの「幸福感」や、「なりわい文化」という言葉を何度も使っていた。
- ・若手のグループで何かをやる時もそうだが、ファンになり、見たり楽しんでもらうことを自主的にやってもらわないと文化は発達しない。文化を強制するのは無理なのではないか。
- ・理想は、目標ができて情報発信が確立されたときに各分野が魅力的に発信できる地点に着地したい。それをコーディネートできる人がいるとよい。
- ・ただ見せるだけではダメ。ストーリーや理由が必要である。

【石田氏】

- ・市外の人間の意見として、小田原に近い場所に住んでいても小田原に観光に行かないし、千葉に住んでいるが、子どもは小田原の産品を知らない。

- ・小田原の人は恵まれていると思うが、それがもう少し外部にも伝わるとよい。
- ・市民に対する発信が先なのはわかるが、その次は外部に発信することも必要なのではないかな。

【鬼木副座長】

- ・豊かさに気づくのは外部から来た人かもしれない。
- ・小田原に住んでいない人に入ってもらうのが良いのかもしれない。

【石田氏】

- ・豊かさは文化と同様に言葉では言い表せないが、それを発信していくのが仕事であり、それを手伝うのが私たちの仕事であるのではないかな。
- ・与えられすぎると求めなくなる。与えない方がガッツが出る。

【畠山座長】

- ・豊かさに気づかせるのではなく、自ら主体的に「何かやりたい」とか「何かに加わりたい、求めたい」と思うことが根源なのではないかな。

【事務局】

- ・観光と文化は表裏にあるもので、ブランド化ができる背景に文化がある。ブランド化はすでにあるものに価値を付け認識し直すことである。歴史として以前から知っていたことを、物語として改めて受け取った時に好きになり方が変わり、自分とのかかわりを持つことができる。そこから文化性が生まれる。
- ・情報発信はこちらから与えたり教えても伝わらない。好きになってもらえる仕掛けを作ったり、別のきっかけを与えることが情報発信なのではないかな。
- ・具体的に何をするか、継続させたり発展させたりするためにどうするか、推進体制はそこまで含んでいるのではないかな。

(4)その他

- ・懇話会は25年度も継続したいと考えており、メンバーの方々には来年も参加してほしいと考えていることを伝え、本年度の懇話会を閉会した。
- ・なお、本日の懇話会で出された意見については、メール等で内容を確認させていただくことを確認した。